

こと、考古資料を解釈する決定的な方法が無かったことが挙げられる。そういった部分にもう一步踏み込んで解釈し、また、発掘調査の進行により現在も各地で発見される多くのタカラガイ関連遺物について新たな解釈法を採用することで、柳田が到達し得なかったタカラガイ信仰の本来の姿を見ることが可能となるのではないか。

日本列島においてタカラガイは、時間的には縄文時代草創期から、空間的には北海道の礼文島まで流通していた。タカラガイの流通から分かることは、いつの時代もタカラガイというある特定の自然物が、人間によって選択され、長い距離を運搬され、時に加工され、模倣されるといふ行為と、そこから垣間見える人々の心と精神の営みである。

それらは信仰の形を変えながら今も静かに日本列島に息づいているが、それはどう復元できるのか。柳田が目指していた本来の形にはどう辿り着いたら良いのか。そもそもそれは可能なのか。柳田の思想を再吟味するため、また、人類の信仰の根源に迫るために、非文字資料をどのように解釈するのか。各分野の研究が進展した今、まだまだ出来ることは多いと考える。

柳田國男の戦時下における祭祀論と戦争協力

由谷 裕哉

本発表は、発表者が近年取り組んでいる柳田國男の神社祭祀論・神道論に関する検討の一環である。発表者は先に『神道と民俗学』（一九四三年）の神社祭祀論を検討したが（由谷「柳田國男『神道と民俗学』における神社祭祀論の再検討」、『民俗

学論叢』三三、二〇一八年）、戦時体制に配慮したような文言（「今度の大戦役は稀有の機会」「国の共同の大敵を克服」など）が複数見られることに関心を持った。本発表はこのような戦時下における柳田の戦時体制との関わり（含・戦争協力）が、この時代における彼の祭祀論とどう照応していたのか、を考究する。そうした柳田の戦争協力的な文言は、彼の一種パターナリズム的な女性観が表出する「日本の母性」（一九四二年）や「特攻精神をはぐくむ者」（一九四五年）に、いわゆる軍国の母を賛美する言説として見られる。

とはいえ戦争協力の姿勢や行動は、柳田本人よりむしろ『民間伝承』誌にヨリ明確に見られる。本発表では、①大政翼賛会の要請による食習調査（一九四一年八月より）、②大藤時彦・倉田一郎・橋浦泰雄らによる、同誌巻頭言の言説（一九四二年五月に始まる同誌第八巻以降）、③柳田國男先生古希記念会による「国際共同研究課題の提案」（一九四四年一月記録、同誌第一〇巻第一号より第六号まで）、の三者をあげた。とくに③は、いわゆる「一国民俗学」とは異なる志向を民間伝承の会が一時期有していた点で注目される。もちろん、これらに関して柳田は表に出していない。

対して柳田個人の戦争への協力姿勢と祭祀論との関係が比較的分かりやすい例として、本発表では柳田が一九四三年七月九日に長野県東筑摩郡教育会で行った講演を検討した。同講演は、柳田が同教育会に氏神信仰の調査を要請する為に行われ、各村から一名ずつ教員が聴講したものとされる。同時代には、柳田が講演手控えの一部を自ら纏めた「氏神様と教育者」

〔『民間伝承』一〇一、一九四四年一月、定本二九に再録〕として知られていたが、聴講者らが謄写版にした講演筆記を近年、『柳田國男全集』三二巻が初めて翻刻した。そのタイトルは「氏神調査に関する柳田國男先生講演の概要」で、五つの項目に分かたれている。重要なのは最初の三項目と考えられるので、以下に概観する。

「農村氏神信仰の状態はどうなつてゐるか」では、大東亜戦争下で信仰が戦争に不可欠のものであるとし、こうした現状で氏神信仰をどう昂揚すべきか、と問いかけ、この信仰が生きている限り、「日本には軍神に続いていくらでも喜んで死んで行く人が出て来る」とする。「氏神氏子の概念はどうなつてゐるか」では、敬神政策の為に信仰は衰えているのではないかとし、その対象たる氏神に対する信仰を調べて欲しい、とする。また元の意味が氏神の子であつた氏子概念も、変化しているとする。続いて氏子に関連する「頭屋制度は残つてゐるか」で、「頭屋制度の残つてゐる所は神信心が強い」、「人心を帰一する力をうむものはこの頭屋制度の復活であると思ふ」などと述べる。

小括として、柳田の「新国学談」三部作は敗戦後の柳田の新天地と解釈されがちであつたが、その中で「氏神と氏子」（一九四七年）に収録された、いずれも戦時下の講演に基づく「祭と司祭者」および「敬神と祈願」と、上記講演「概要」との比較対照を試みた。祭祀組織を主に論じた「祭と司祭者」には頭屋制度を祭あるいは神道を支える原型的な組織と見る視点が、祭神の位置づけおよび信仰論を主題とした「敬神と祈願」には

信仰の対象を氏神と設定する志向が、各々見られる。つまり、これらは柳田が戦時下において戦時体制との関わりの中で氏神・氏子について試行錯誤した見解と、連続しているのではない。

陸前高田市における震災遺構の意義

—— 仏教者の観点を手掛かりに ——

金沢 豊

津波災害の記憶の保存と継承の必要性は論を俟たない。教訓と死者を「忘れない」目的の為に、記憶想起の手がかりとなるハード面（震災遺構、慰霊碑などのモニュメント）の重要性を確認しつつ、ソフト面（建立物の場所提供や意味付け）にこそ宗教者の役割があると筆者は考えてきた。震災遺構は自治体の復興施策と結びつき管理の面がトピックになりやすい。しかし、それぞれの遺構で人々は祈りを捧げ、死者との交流の縁になつてゐる以上、宗教的観点も必要だろう。そこで、東日本大震災からの復興途上にある岩手県陸前高田市の仏教者が関与する取組みを手掛かりに、震災遺構のあり方を問い直したい。

陸前高田市米崎町の普門寺（曹洞宗）では、五百羅漢像の製作を二〇一三年から毎年推進してきた。五百羅漢だからといって初めから五〇〇体整えることが目的ではなく、石仏の製作は招聘した専門家が指導にあたり、市民一人ひとりが亡き人と思いを馳せながら新たなモニュメントを作つた。そこで重要なのは思いを引き受けて法要を執行する仏教者の存在である。普門寺で実施されている理由は、震災後、市内の身元不明者のご遺

JAPANESE ASSOCIATION FOR RELIGIOUS STUDIES

President YAMANAKA Hiroshi

Directors

ASHINA Sadamichi
HASEBE Hachirō
HOSODA Ayako
ISHII Kenji
KIMURA Toshiaki
MINOWA Kenryō
OKADA Mamiko
SHIMODA Masahiro
SWANSON, Paul L.
WATANABE Masako
YUMIYAMA Tatsuya

FUJIWARA Satoko
HAYASHI Makoto
ICHIKAWA Hiroshi
IWATA Fumiaki
KOHARA Katsuhiko
MIYAMOTO Yōtarō
SAKURAI Yoshihide
SUGIMURA Yasuhiko
TSURUOKA Yoshio
YAGI Kumiko

FUKASAWA Hidetaka
HORIUCHI Midori
IKEZAWA Masaru
KETA Masako
MATSUMURA Kazuo
MURAKAMI Kōkyō
SAWAI Yoshitsugu
SUZUKI Iwayumi
WATANABE Kazuko
YAUCHI Yoshiaki

Editors

ENDŌ Jun
HE Yansheng
KIKUCHI Tatsuya
OKINAGA Takashi
TOGAWA Masahiko
YAUCHI Yoshiaki

GOTŌ Masahide
HORIE Norichika
MURAKAMI Tatsuo
SHIBATA Daisuke
TOMIZAWA Kana

HAGA Manabu
KAWASE Takaya
NAGATANI Chiyoko
TERADO Junko
YAMADA Shin'ya

宗 教 研 究 第九三卷別冊

二〇二〇年三月三〇日 発行

編 行 集 日 本 宗 教 学 会

代 表 山 中 弘

制 作 三 美 印 刷 (株)

〒113
-0033 東京都文京区本郷三―二四―一
伊藤ビル三〇一

日 本 宗 教 学 会

電 話 〇三五六―一五九二〇八
F A X 〇三五六―一五九二〇九
URL <http://jpars.org/>
振替 〇〇一三〇一五四一七二七